

榎

K A Y A

国際関係
フォトジャーナル

vol. 01

亜細亜大学国際関係学部編集



*Asia University
Faculty of International Relations*

- 02 新学術誌『榧』の創刊を祝して
永網 憲悟
- 04 *Essay*
「文明の十字路」の経済学
新井 敬夫
- 10 *Essay*
語られないホイアン
大塚 直樹
- 16 *Essay*
ルワンダの難民キャンプとその問題点
福海 さやか
- 22 *Essay*
好ましからざる国際化—路傍に咲く花の出自—
中野 達司
- 28 銅像 よもやま話1
首都の銅像
高山 陽子
- 35 ゼミナール紹介
秋月ゼミ「解がないところから解を見出す努力」
秋月 弘子
- 38 フィールドワーク
2013年夏季韓国フィールドワーク
金 柄徹
- 46 学部行事報告
「行動力あるアジアグローバル人材」の育成に向けて
新井 敬夫
多文化コミュニケーション学科開設記念マレーシア映画上映会
増原 綾子
多文化コミュニケーション学科開設記念講演会
中野 達司



かや 榧とは

亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榧の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつつ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榧とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。

また民俗学の世界では、榧（栢）が「ある変化ないし結節点におかれる標徴の木」といわれます。多文化コミュニケーション学科の新設、文部科学省グローバル人材育成推進事業の採択など学部の節目として、常に初心を大事にしつつ、学生の最新ニーズに応えうるカリキュラムを実践してゆきたいと考えています。



亜細亜大学国際関係学部
〒180-8629 東京都武蔵野市境 5-24-10

学部についての詳細は
<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

新学術誌『榧』の創刊を祝して

国際関係学部部長 永綱憲悟

この度、新学術誌『榧(かや)』…国際関係フォトジャーナル』刊行の運びとなりました。まずは、祝意とともに、ここに至るまでの関係各位のご尽力に対して大いなる謝意を表したく思います。とりわけ、企画・構想から、諸方面との協議、誌名の公募・選定、原稿依頼に至るまでの作業につき、労力を惜しむことなく、見事に遂行されてきた国際関係研究所長の中野達司教授、運営委員の大塚直樹講師をはじめ研究所運営委員会の皆様にあらためて御礼を申し上げます。

さて、本学部には、学部創設以来、数多くの優れた論文を掲載してきた学術誌『国際関係紀要』があります。それに対して本誌は、写真素材等を多数用いることを可能としており、とくにフィールドワーク研究手法をとる教員にとって魅力的な媒体となります。このような新学術誌誕生の背景には近年の学部の活発な動きとそれを支える教員、とりわけ若手教員の熱意ある教育研究活動の表れがあるように思えます。平成24年度には、従来の国際関係学科に加えて、多文化コミュニケーション学科が設置されました。また同年秋には、文部科学省グローバル人材育成推進事業に採択され、いっそうの国際交流・国際調査の進展と、グローバル化時代にふさわしい教育研究を期待されています。本誌はまさにそのような潮流の中で生まれたものといえましょう。

「ちなみに本誌名となった「榧」は主に暖帯に生育する常緑針葉樹であり、成長は遅いものの、寿命が長く、大きく成長し、またその材は堅くしっかりしており、碁盤や将棋盤等に供されるそうです。そして歴史を振り返れば、昭和16年本学(当時は興亜専門学校)創設時に植樹された記念樹がこの榧だそうです。この植樹を当時どのような方々が行われたか承知しておりませんが、植樹後まもなくして太平洋戦争が勃発し、やがて在学生たちの多くは応召されることとなりました。その不幸な戦争の中で亡くなられた在学生あるいは卒業生も少なくありません。学問としての国際関係論、あるいは多文化コミュニケーション研究の重要な目的の一つは、いうまでもなく、そのような戦争を防ぎ、諸国・諸文化間相互の理解を促進し、平和な世界を維持することです。本誌名から、そのような学問の使命も想起しておきたいと思えます。

ところで、本誌の中心的な表現形式となるであろう「写真」について、20世紀アメリカの著名な作家・評論家スーザン・ソントグは次のように語っています。「写真は時間だけでなく空間の薄片でもある」「写真を通じて世界は一連の無縁で自立した分子となり、過去・現在の歴史は一揃いの逸話と雑報となる」。さらにソントグは、「写真による世界の認識の限界は、それが良心を刺戟しながらも、結局は倫理的あるいは政治的認識にはなりえないということである」とまで語っています(写真論「近藤耕人訳、晶文社、一九七九年、三〇～三二頁)。

この主張には反論もありうるかもしれませんが、写真がそれだけでは明晰な論述や分析を示すものとはならないことは確かであろうかと思えます。こうした観点から言えば、当然ながら、本誌(フォトエッセイ)は、研究紀要(研究論文)にとつてかわるものとはなりません。本誌は、むしろ、執筆者にとつては研究の助走あるいは余滴を披露する場となり、読者にとつては研究理解への補助線あるいは誘因の役割を果たすものとなるように思えます。本誌刊行により、さらに多くの本格的研究が生まれ、それがまた本誌を多彩かつ充実したものとさせることを期待して祝辞とさせていただきます。



3. シンガポール・ジュロン港——中継貿易港として繁栄したシンガポールは、その後工業化に成功し、さらに国際金融センターの一つにもなった。4. マレーシアの電子産業——マレーシアは1970年代より電子、電機産業を中核とした「輸出指向型工業化政策」を推進してきた。「東洋の女性の器用な手」は外国企業を惹き付けた。

Essay Economics

「文明の十字路」の経済学

新井敬夫

マラッカ海峡に突き出したユーラシア大陸最南端のマレー半島、そしてユーラシア大陸で海から最も遠い都市であるウルムチ(烏魯木齊)を区都とする中国新疆ウイグル自治区、一二つの「東西文明の十字路」は、人々、文物が交錯した「経済・交易の十字路」でもあった。この二つの十字路は、海洋と内陸、熱帯雨林と草原、小国と大国の一部という点で対照的であるが、共に主としてイスラム教を信仰する人々の生活の舞台でもある。現在、この舞台はどのように回っているのだろうか。

インド洋と南シナ海、そして太平洋をつなぐ海路、マラッカ海峡を西側に望む現在のマレーシアとシンガポールは、古くから海上交通の要衝であった。イギリスはマレー半島西岸のペナン、マラッカ、シンガポールに直轄の海峡植民地(Strait Settlements)をおき東南アジア経営の拠点とした。また、半島内陸部(英領マラヤ)イギリスの保護国)ではすずや天然ゴムも開発され、これらはマラッカ海峡に面する港から輸出された。海上交通の要衝と天然資源——マラヤは収益性の高いイギリス植民地と言われた(しかし、海峡植民地すなわちペナンやシンガポールは当時から自由貿易港であったため、イギリスは関税収入による恩恵を受けなかったといわれる)。1950(昭和25)年の一人当たり国民総所得を見ると(Maddison, A., 2001. および Fogel, R. W., 2004) 当時のマレーシアは1559ドル(1990年基準

の国際ドル、購買力平価による調整値)で、日本の1926ドル(同)とそれほど変わらなかった。ちなみに、この2国よりも当時のシンガポール、香港は高く、逆に台湾、韓国、タイ、インドネシアは低かった。そして、インド、中国はさらに低かった。

海峡植民地の一つだったペナンには1970年代に大規模な臨海型工業団地(バヤンレパス自由貿易区)が形成され、ここはその後の輸出主導型の経済成長を牽引した。また、周辺地域に雇用機会を提供し、貧困削減にも貢献した。都市国家シンガポールにも大きな工業団地(ジュロン工業地域)がある。マレーシアの首都とその外港クランを結ぶクランバレーにも近代的な製造業が集積してきた。バッテリー(マレー風ろうけつ染)、ピーター(すず合金)、熱帯果物加工品、木材加工・家具などの伝統産業も、電子・電機産業などの近代輸出産業と共存する。マレーシアは今や「ハイ・エグジティブ・エコノミー」の旗手で、世界有数の金融センターとなっ

1. マレーシア・マラッカ近郊のゴム農園——ゴムはマレーシアだけでなく東南アジア全域で栽培される。幹に斜めの切れ目を入れ、樹液を採集する。2. マレーシアの首都クアラルンプール中心部——イギリス支配時代からマレー半島内陸部の開発拠点であった。近代的なビル群と伝統的なイスラム建築である旧モスクが隣接する。



たシンガポールに次ぐASEANのセカンダランナーだ(資源依存のブルネイを除く)。すでに1983年時点でもGDPに占める輸出の比率は約52パーセントと高かったが、さらに1993年には約89パーセントにもなっている(新井、2000、220ページ)。

19世紀以降、パクス・ブリタニカのもとでのグローバル経済に対して開放的であった自由なマラッカの海は、現代のグローバル経済に到るまで、その遺産を受け継いできたかのように見える(ただし、グローバル経済に組み込まれてきたが故に、1920年代から30年代にかけて、この地域は「世界大恐慌」の影響を受けた。これもまたグローバル経済の教訓である)。

中国とヨーロッパをつなぐ陸路、シルクロードが貫く中国・新疆ウイグル自治区にも、交通の要衝は点在する。瞳の色が異なる人々が行き交い、交易、商業

* * *

* * *



7. タクラマカン砂漠（タリム盆地）北部のエネルギー資源開発——新疆ウイグル自治区は、発展する中国にとって貴重なエネルギー供給地である。この天然ガスを沿海部へ送る計画を「西気東輸」と言う。

ること、同じ品質の財ならば生産性が高いこと（したがって価格が低いこと）、他国では生産できない財を生産できるところだ（この場合、他国の生産性はゼロだから、自国の生産性がどんなに低くとも、生産性で負けない）。第三番目の要因から考えると、新疆の輸出はもっと多くてもよさそうに思えるのだが。

世界銀行の報告書では、内陸国（内陸地域）は経済発展の機会に恵まれにくい、と指摘されている（World Bank, 2001, 新井訳2004）。この書での内陸国の原文は「land locked」で、「閉じ込められた」ということになる。経済発展の鍵は「コネクティビティー（連結性）」である、とも言われる。運輸・ロジスティクス、情報・通信、熱・エネルギー供給に関連するインフラ整備が必要だと言う訳だ。内陸国が本質的に不利か否かは別として、少なくとも「現代世界経済においては」不利な立場になりがちだ、とは言えそうである。高所得国スイスは内陸だがバーゼルからロッテルダム港（いわゆるユーロポート）までライン水運の恩恵に浴することができると、現代のシルクロード経済のおかれた位置を理解するためには「北京やモスクワから遠い内陸という地理上の問題だけでなく」中国や旧ソビエト連邦のもと、様々な面で周縁化してしまったという点もしっかりと考慮しなければならない。

交易の拠点でもある「文明の十字路」を、そこが海であっても陸であっても、様々な民族、人種が行き交った。天然資源開発などで経済活動が盛んになれば、人がやってくる（または、連れられてくる）。必然的にそこには多民族（多人種）社会が形成されることになる。もともとマレー人の住んでいたマレーシアには、中国南部や同じイギリス植民地であったインドから移民がやってきた（または連れられてきた）。農村で伝統的な生業に従事していたマレー人に対して、中国系やインド系移民は新たな経済機会、すなわち都市での商業や交易の機会、鉱山開発に関する機会を享受できた。これが、後に大きな民族間経済格差となって社会に不安定さをもたらした。1960年代の民族暴動を経て、1970年代よりマレーシア政府はこの民族間の経済格差を是正する政策（プミプトラ政策）をとらざるを得なかった。現在も、民族問題はなくなったわけではない。だが、アジア



5. 新疆ウイグル自治区の麺工場——日本で言う「袋入りインスタントラーメン」の製造工程は、労働集約型の技術を用いている。

の舞台となったトルファン（吐魯番）、カシュガル（喀什）などは、今はシルクロード観光の見所だ。ただ産業の観点からは、発展著しい中国の中では相対的に遅れた地域と言える。

タクラマカン砂漠北辺、天山南路にあるロンタイ（輪台）などの石油・天然ガス採掘拠点、それからウルムチのような大都市では経済に活気がある。また、乳業、飲食物加工業、製粉・製麺業などの食品加工業は広く域内に分布する。これらの部門に原材料を供給する乾燥帯農業やオアシス農業（野菜、果物、綿花、小麦など）、そして牧畜などが新疆の農村経済を特徴づける。各地の伝統産業、例えばホータン（和田）の玉や絨毯、カシュガルの楽器や金属食器類などは民族色豊かで味わい深く、かつての手工業技術を思い起こさせてくれる。ホータンの絨毯産業は「財政扶貧項目」で、貧困層に雇用と所得機会を提供する。

ただ、全体として生産性はそれほど高くはなく、近代産業が発展しているとは言えない。また、輸出能力もそれほど高くない。『新疆ウイグル自治区産業連関表（2002年）』を見ると、域内での付加価値額に占める中国の他地域への移出が約38パーセントで、外国への輸出はわずかに約6パーセントにすぎない（詳細は新井、近刊）。このように、現代のシルクロードでは外国に開かれた交易の面影はあまり見られない。外国貿易（輸出）の発生要因は、優れた品質の財を生産す



6. 新疆ウイグル自治区の綿農場——ここで採れる「新疆綿」は、アメリカ南西部産やエジプト産と並び、良質の繊維であると言われる。



9. 新疆ウイグル自治区の絨毯工場——絨毯はこの地域の伝統産業である。大きな絨毯製作は数人がかりで行う。女性の雇用・所得機会でもある。

参考文献

- [1] 新井敬夫、2000、「マレーシアにおけるハイ・エクステンジ・エコノミーの分析」、『国際関係紀要』第9巻、第1,2合併号、亜細亜大学国際関係研究所、217-235ページ。
- [2] 新疆ウイグル自治区統計局(編)、2004、『新疆投入産出表(2002年)』
- [3] 世界銀行、2001(新井敬夫訳、2004)、『グローバリゼーションと経済開発』、シュプリンガーフェアラーク東京。(World Bank, 2001, *Globalization, Growth, and Poverty*, Oxford University Press)
- [4] Fogel, R.W., 2004, *High Performing Asian Economies*, NBER Working Paper w10752. (down loaded from NBER web site, <http://www.nber.org/papers/w10752>)
- [5] Maddison, A., 2001, *The World Economy; A Millennial Perspective*, OECD (政治経済研究所訳、2004、『経済統計で見る世界経済2000年史』、柏書房)

半島にも、砂漠のシルクロードにも、かつて交易で賑わっていた「文明の十字路」はある。でも今、海の交易は栄え、陸の交易はそれに比べようもない。国際貿易の利益を海から享受しているマレーシア・シンガポールと、対照的なシルクロードは同時代に存在する。20世紀末から21世紀の今日までに私が見てきた「海

注：駆け出しの研究者の頃、マレーシアでの現地調査に関して、松下国際財団(現、公益財団法人

の「十字路」と「陸の十字路」の経済発展はあまりにも異なる。モスクやミナレットから流れるアザーンの(お祈りの開始を告げる)声は同じように聞こえても。

松下幸之助記念財団)の研究助成(代表者：新井敬夫、助成番号：000001)および(NPO)を受けた。また、国際連合地域開発センターでの調査研究の仕事を通して、アジア太平洋地域の産業開発に関する知見を蓄積できた。亜細亜大学に勤務してからは大学の資金で研究を進めることができた。近年の新疆ウイグル自治区調査も大学のプロジェクト予算による。このような研究環境に深く感謝している。



8. 新疆ウイグル自治区の市場での羊取引——羊だけでなく、飼料、牧畜用具等も売買される。

経済危機以降のマレーシアでは、むしろ民主化に向けての改革スタンスを軸とした政治勢力の対立のほうが、民族対立よりも目立つように見える。この対立軸のほう健全と言えれば健全かも知れない。歴史に「三はない」が、マレーシアに民族対立がなかったら、経済発展の速度はもっと上がっていたように思う。

* * *

主として漢民族で人口が構成される成長著しい中国沿海部の諸省とウイグル族などのシルクロード諸民族で構成される新疆ウイグル自治区との「地域間所得格差」は同時に「民族間格差」でもある。シルクロードは計画経済期、市場経済化期をとおして周縁化の道をたどってしまった。民族間格差に限らないが、さまざまな格差問題を解決するために中国政府は「和谐社会(調和のある社会)」を目指すことになった。また、最近では、各民族(漢族、モンゴル族、ウイグル族など)を包摂する「中華民族」という言葉を用い

て、民族格差・対立の先鋭化の抑制に腐心しているようだ。これらのスローガン(アロバガンダ)は人々にどのような受け止められているのだろうか。政治的スローガン(アロバガンダ)の行く末は、おそらく経済開発、西部大開発の進行にも関係する。

言語、宗教、慣習などを異にするエスニックグループの共存と分離、対立と協調、無関心と干渉、親愛と敵意、寛容と不寛容、差別と公平、統合と分裂……何となくこのような言葉で表され、私には「実感として」理解できない複雑な力学は、近代国民国家、特に多民族国家に大きな課題を突きつけてきた。この漠とした、一般に「民族問題」と称される課題が深刻な問題として顕在化するのには、一つには民族間の生活水準・経済格差が容認されない水準、あるいは社会的臨界点に達する(達した)時だろう。

* * *

ユーラシア大陸南端、熱帯のマレー



5. ライトアップされた世界遺産の街並み。



4. 土産用の提灯が売られる世界遺産区への対岸の夜市。

ホーチミンやハノイから最短でアクセスする場合には、空路を使いダナン空港まで行き、そこから陸路を南下することになり、必ずしもアクセスのよい立地条件

ホイアン市は、ベトナム中部クアンナム省の一都市であり、中部最大の商業都市であるダナン市（中央直轄市）の南約



ホイアンとは？

Essay Southeast Asia

語られない ホイアン

大塚直樹

30キロメートルに位置する。ホイアンは、トゥーボン川に面した沿岸都市で、市域面積が約6068ヘクタールとなっている。このホイアン市の街並みの一角（旧市街）、およそ30ヘクタールが歴史的な国際貿易港の文化融合を顕著に示していること、伝統的なアジアの貿易港の状態をよく保存していることを理由としてユネスコ世界遺産に登録されている。かつてのホイアンは、現在のダナンを凌ぐほどの貿易港を有していたといわれる。16〜18世紀には、海上貿易の拠点として、鎖国令（ママ）発布以前には多くの朱印船も来港し、日本町が形成された（岩生、1966）。

ベトナム中部の町ホイアンと聞いて連想されるキーワードには、世界遺産の街並み、観光地、提灯、日本橋（橋寺）、日本町、日本人の墓などが挙げられよう（写真1〜6参照）。実際にインターネットにアクセスし、グーグルやヤフーなどで画像検索をしてみると、こうしたキーワードを反映したイメージや写真等が散見される。観光地としてのホイアンは、

とはいえない。にもかかわらず、ホイアンは、多くの日本人が訪れる観光地となっており、日本とのゆかりがある街として紹介されることが多い。

ただし、観光地ホイアンと日本との関係を歴史的にひも解くとき、これらのイメージとは異なる局面がみえてくる。すなわち、それは日本軍の仏印（フランス領インドシナ）進駐の歴史であり、軍事行動に付随した外邦図の作製である。そこで以下では、仏印進駐と外邦図の作製の概要を述べた上で、この史実とホイアンとの関わりを紹介したい。

仏印進駐と外邦図

周知のように、1940年代の日本軍による東南アジア侵略は、重要戦略資源の獲得を目的とした。仏印進駐は、こうした軍需資源の獲得ならびに蒋介石軍の援助ルートへの遮断を意図して行われた。1940年9月に北部仏印に進駐した日本軍は、1941年7月には南部地域まで進駐し、仏印を占領した。

このような日本軍の軍事行動に先行・



1



2



3



6

6. ホイアン郊外に位置する日本人の墓。墓の正面からみて右側の石碑には「1647年、日本の貿易商人谷弥次郎兵衛（たにやじろべえ）ここに眠る」とある。

並行して作製された地図が外邦図と呼ばれる。ここで「外邦」とは、原則として植民地を含んだ当時の帝国日本の領域以外を指す。外邦図は、1945年8月の第2次世界大戦の終結まで戦争や植民地経営にむけて作製されてきた地図とされ、軍事的に作製された。軍事における地図の重要性は、その作製を軍が担当する場合が多いこと、軍事秘密として場合によっては現在でも民間の使用制限が課せられていることに現れている（小林、2009）。つまり、外邦図は植民地支配や戦争の趨勢を決定するひとつの重要な



7. ファイフォと描かれた提灯。日本橋に飾られている。

ホイアンとその周辺地域を示している。図1の右余白には「仏領印度支那50万分1図12号(左)」と記され、左余白には「昭和20年製版」と記載されている。ただし、同図とは別のホイアン周辺の40万分の1の外邦図の左余白には「昭和15年9月製版／同15年9月発行」とあることから(図2)、1940年の日本軍の北部仏印進駐を前後して、すでに関係機関によって地図が作製されていたことがわかる。これは戦時における地図の重要性を示す一例である。

図1において中央部のFAIFOという地名が注目される。図中では、現在のホイアン中心部の位置にホイアン(Hoi An)という地名が記載される代わりに

FAIFOと示されている。つまり外邦図上、すなわち1940年代の日本軍では、ホイアンではなくFAIFOとして当該地域が認識されていたことがわかる。

FAIFOという地名について、まず、ベトナム語のアルファベット表記ではFの文字を使用しないことから、当該言語表記に基づく単語ではない。一説には、ホアイフォというホイアン近隣の村名をヨーロッパ人がなまけて記録した結果と指摘されている(ファン・フィ・レ、1993)。また小倉は、ベトナム人研究者の五つの見解を取り上げて、17世紀の地図に示されたホイアン河口部の地名である Hai Pho (海府、海岸部の要衝の意)を外国人がフェイフォ(Faifo)と発音し、それがヨーロッパの探検家や宣教師たちによって海図に記録されたことに由来すると推察している(小倉、1989)。したがって、少なくともFAIFOという名付けは西洋からの視点ととらえられる。

こうした西洋からの視点が見られる。図1の外邦図に取り込まれた背景には、この外

邦図の作製方法が関連している。地図の余白には、作製主体として「参謀本部」(左下余白)が明記されており、さらに依拠した地図情報として「本図は1937年印度支那総督府地理局調製50万分1図の多色刷を4色に応急複製せるものなり」(右下余白)と示されている(図3参照)。ここから当該図はフランス植民地政府が作製した地図を複製したことがわかる。つまり、FAIFOと描かれた外邦図にはフランスの植民地主義が反映されており、言い換えれば、無意識的であれ、大東亜共栄圏を提唱した日本の帝国主義的な視線が投影されている。

また、FAIFOという名称は、現在のホイアンの景観のなかにも埋め込まれている(写真7)。さらにFAIFOは、ホイアンのタクシー会社の名称(タクシー会社名は正確にはFAIFO)に残っており、世界遺産区に出店している店舗の名称にも利用されている。このFAIFOという店舗にて店員に話を聞いてみると「FAIFOとはホイアンの昔の名称。FAIFOは、か

ツールとみなされていたことがわかる。外邦図は、現在もなおよくわかっている地図という点がその特徴とされている。理由としては、前述のように当該地図が軍事目的で作製されたため、秘密情報として外部に公開されず、また第2次世界大戦後に大量に焼却処分されたこと、第2次世界大戦終了後に外邦図に責任もつ日本政府機関がなくなってしまうこと(小林、2011)、さらに戦争や植民地という結びつきに対して暗い否定的なイメージがもたれたこと(久武・今里、2009／小林、2009)などが挙げられている。結果として、終戦後、外邦図はほとんど顧みられることがなかった。また外邦図は、その作製方法が多様であるという特色をもつ。具体的には、日本軍が測量を実施し、さらに空中写真を撮影して作製したものや、外国製の地図を入手して複製したものなどがある(小林、2011)。

こうした外邦図のなかで特に東南アジアを中心とした地域に関する地図は、立教大学アジア地域研究所(旧、ア

ジア地域総合研究施設、1958年発足)に所蔵されている。同施設の設定に尽力した別技によれば、立教大学の研究施設では東南アジア地域に関する研究の基礎的資料として図書約3500冊、各種地図約5000枚を蒐集し、さらに地図に関しては東南アジア各地域における大縮尺の地形図および水路部作製の海図を中心に集めたという(別技、1967)。この研究所に所蔵されている外邦図のうちホイアン周辺を含む2枚を今回の分析対象とした。それぞれの縮尺が50万分の1と40万分の1の地図となっている。

外邦図のホイアン

図1は外邦図に描かれた



図1. 外邦図「トゥラーヌ TOURANE 仏領印度支那50万分1図12号(左)」に描かれたホイアン(立教大学アジア地域研究所蔵、一部)。図2. 「トゥラーヌ TOURANE 仏領印度支那40万分1図8号」の製版・発行年月(立教大学アジア地域研究所蔵、一部)。図3. 図1の外邦図余白に示された備考(立教大学アジア地域研究所蔵、一部)。



11. 民族正気と刻まれたホイアン事件の記念碑。その後方には第2次ホイアン事件で殺害された10名の名前が刻印された墓がみえる。

参考文献

- [1] 岩生成一(1966)『南洋日本町の研究』岩波書店。
 [2] 小倉貞男(1989)『朱印船時代の日本人——消えた東南アジア日本町の謎』中公新書。
 [3] 菊池誠一(2003)「現地資料にみるベトナム『ホイアン事件』の概要」『学苑』756号、1-8ページ。
 [4] 小林茂(2009)「近代日本の地図作製とアジア太平洋地域」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会、2-26ページ。
 [5] 小林茂(2011)『外邦図——帝国日本のアジア地図』中公新書。
 [6] 久武哲也・今里悟之(2009)「日本および海外における外邦図の所在状況と系譜関係」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会、32-46ページ。
 [7] ファン・ワイ・レ(1993)「ホイアン——歴史と現状」日本ベトナム研究者会議編『海のシルクロードとベトナム——ホイアン国際シンポジウム』ホイアン国際シンポジウム日本語報告書編集委員会訳、穂高書店、26-38ページ。
 [8] 別枝篤彦(1967)『立教大学アジア地域総合研究施設』の設立』立教大学史学会編『立教大学史学会小史』(『史苑』100号特集)立教大学史学会、180-182ページ。

をみると、前者が中華民国34(1945)年であるのに対して後者が中華民国35(1946)年11月となっている。
 ホイアン事件の背景には、前述のように抗日活動の監視、特に中国国民党員として蒋介石と連携する活動家の取り締まりという目的が存在した。しかし、菊池によれば、すべての犠牲者が中国国民党の直接的な関係者とは断定できず、その意味で被害者に対する十分な取り調べが行われたのかも定かではないと

いう。また、日本側にはこの事件の記録がほとんど残されていないことが指摘されている(菊池、2003)。さらに、記念碑が建立されたにも関わらず、現地ホイアンでもこの事件が積極的に取り上げられることが少ない。したがって、ホイアン事件は、ホイアンにおける日本の表象から「排除」されてきたことになる。

当然のことながら、すべての歴史的记忆が記録され、かつ後世に伝えられるわけではない。現在のホイアンにおける日本の表象をみてもそれは明らかであろう。歴史的な交易を通じて日本との交流をもってきた世界遺産ホイアンという「光」の部分のみをみるだけでなく、「陰」の部分を知った上で現地を訪問することも一つの観光のあり方といえよう。

*外邦図についての情報は原則として新字体に直して示した。なお、写真はすべて2013年12月に筆者が撮影した。



8. ホイアン事件の被害者の肖像画がある中華会館の建物。

ホイアンにおける「排除」された日本

つてフランス(人)が名付けた」と解説してくれた。なお、ホイアンという地名およびその港は16世紀の末には生まれたとされている(ファン・ワイ・レ、1993)。したがって、当該地域は、一方ではホイアンと呼ばれ、他方では西洋のまなざしから FAHO とも名付けられ、現在では再びホイアンという地名になったと考えられる。また、FAHO は一つの記号として現代のホイアンにその名残をとどめている。しかし、この呼称と外邦図作製という日本との関わりが前景化することは極めて限定的である。

ホイアン世界遺産区のチャムナー通り64番地には中華会館が位置している(写真8)。この中華会館は、別名で5幫会館とも呼ばれ、中国系移民全体の会館といわれている。会館を入って右手に13名の遺影(肖像画)が掲げられている(写真9)。13名の肖像画の上には、中国語で「越南中圻華僑抗戰烈士遺像(1943・1945)」と記されている。これらの人びとは、日本軍の仏印進駐以降に、日本軍の憲兵によって逮捕・殺害された華僑である。この出来事は「ホイアン事件」(菊池、2003)と呼ばれる。菊池によれば、ホイアン事件は、1943年4月と1945年春の計2回発生したという。1943年には28名が逮捕され、そのうちホイアン在住華僑3名が殺害され、1945年には100名以上が逮捕され、ホイアン在住華僑を含む10名が殺害された。いずれも、反日活動に対する取り締まりの一環として、活動者が逮捕・拘束された。この事件は、1945年8月の日本の敗戦後、ダナンに進駐してきた中国国民党



9. 中華会館内(敷地内に入って右手)に設置された13名の肖像画。10. 清明亭と周辺景観。左側の建物の軒下には清明亭ではなく「清明祠」とある。

軍の日本軍に対する取り調べの過程で発覚した。日本の敗戦後、遺族は埋葬されていた遺骸を掘り起こし、ホイアンの郊外に位置する清明亭の墓地に埋葬し、「民族正気」と彫られた記念碑を建立した(菊池、2003)。
 清明亭はホイアン市内のハイバーチュン通りを北上し、トンドゥックタイン通りを左折した突き当たりの左側に位置している(写真10・11)。当該施設の墓には1945年に殺害された10名の名前のみが刻印され、その前方に位置する記念碑には13名の名前が刻まれている。建立年

Essay Rwanda

ルワンダの
難民キャンプと
その問題点

福海 さやか

ルワンダは一九九四年の虐殺で国際社会の注目を集めた国である。虐殺と、今も続くその事後処理はルワンダ政府の政策の中で重要な一部を占めている。その中には難民問題も含まれている。虐殺を逃れようとした国民が近隣諸国に避難した。その後、避難先に定住する者、ルワンダに帰還する者(または帰還する意思のある者)とに分かれた。いずれにしても難民にとっては辛い選択である。なぜなら、ルワンダに戻れば虐殺を行った者と暮らすことを意味し、隣国を定住先とすれば、定住地で部族争いに巻き込まれる

可能性があるからである。難民の流出元であるルワンダだが、同時にブルンジやコンゴなど近隣諸国からの難民を受け入れてもいる。国際連合難民高等弁務官事務所 (UNHCR) によると、ルワンダが受け入れている難民総数五七六〇〇人のうち九九%はコンゴから逃れてコンゴに移り住んだ者たち―つまり、元々はルワンダ国民であった人たち―も含まれている。この人々をルワンダ政府は「コンゴからの難民」とみているが、コンゴ政府は「ルワンダからの難民」と主張している。ルワンダからの難民がリを否定され、政治的に複雑な立場にある。

ルワンダ外務大臣ムシキワボによると、東アフリカで見られる難民の多くは一九九〇年代の政治とそれがもたらした政情不安定が生み出したものである。そのため、現在の東アフリカは一九九〇年代に行われたことの代償を支払っている途中にあり、難民はル



1・2. ルワンダ



3. キゲメ難民キャンプ

キゲメ難民キャンプ

二〇一二年六月、ルワンダ政府はコンゴに抜ける舗装道路にほど近い丘を一つ整備し、新しく南部に位置するヤマガベ地区 (Nyanagabe District) にキゲメ難民キャンプを開設した。コンゴ東部、北キブ (Kivu) での戦闘と状況悪化に伴い避難民の増加が予想されたからである。

UNHCR から提供されたテントに二八家族一四一名が移り住んだ。一〇〇張のテントから始まったキゲメ難民キャンプは毎日五〇張ずつ拡張され、八月には丘全体を埋め尽くす程の数になった。しかし、コンゴから流入する難民の数を考えるとまだ不十分であり、更に拡張が必要であると見込まれていた。九月、難民キャンプの人口は一四〇〇〇人に達した。ルワンダ政府はニーズが収容可能人数を超えたとして、十二月にキゲメ難民キャンプの拡張を決定した。

キャンプ設営と資金問題

難民キャンプ拡大は政府財政にとって容易なことではなかった。なぜなら、難民キャンプ設営地はほぼ無期限に占拠される土地となるため、私有地の借り上げではなく国有化したからである。そのため、キャンプの拡大は更なる土地の買い上げと所持者・利用者への補償金の支払いを意味する。キゲメ難民キャンプ設営の際には、ルワンダ政府はキャンプ建設

準備資金の中からヤマガベ地区が所有する土地を買い上げ、その地を耕作地や住居として利用していた人たちにも十分な補償金を支払った。その額は二〇〇〇万ルワンダフランにのぼった。

ルワンダ政府が地域住民に配慮した難民キャンプ設営を可能にした要因の一つは国際社会からの支援である。政府や非政府組織 (NGO) から支援物資が寄せられた。例えば、日本政府は一七二〇〇万ルワンダフランを難民キャンプ建設費用として寄付し、ルワンダ政府の財政を支えた。また、国際的な NGO のルワンダ支部であるワールドビジョン・ルワンダは一〇〇〇万ルワンダフラン分の衣類や日用品などを難民キャンプに寄付し、避難民の生活支援に貢献した。

政府財政を更に圧迫するであろう難民キャンプの拡大決定された背景には国際連盟 (国連) が出したプロジェクトがあると考えられる。ルワンダ政府の政策発表から三ヶ月後、UNHCR はコンゴ難民のためのプロジェクトを発表した。

六九六〇万ドルの予算で運営され、その中から一七七〇万ドルがルワンダー特にキゲメ難民キャンプの運営にあてられるとされた。国連は二五〇〇〇人規模の難民キャンプでは状況に対応しきれないとしており、ルワンダでの難民受け入れ規模を拡大するべきであるとしたからである。

難民流入による地域への影響

難民キャンプの建設は、それに伴う急激な人口の増加によってキゲメ一帯に大きな変化をもたらした。今まで丘と森であった所に人が溢れ、警備体制が敷かれた。急ごしらえの居住地域は秩序に欠け、武装勢力の一部が紛れ込む可能性が高い。ケニアやウガンダであったように、紛れ込んだ武装勢力が難民や地域住人を攻撃する可能性がある。そのため、キャンプ及びその周辺の警戒は必須である。安全確保のために多くの警察官が配備され、キャンプ近くの道路は警備・警戒地域になった。警官たちは通行する

車の中にも警戒を怠らず、不審な状況と見做した場合は職務質問を行う。

また、地域のインフラや経済活動にも変化が現れた。難民キャンプの住人を相手にした出店が建ち並ぶようになり、市場が活性化された。その反面、需要に対して食料品等の供給が間に合わず、物価が四〜五倍に上昇したためキゲメ住民の生活を圧迫した。物価の上昇に対応出来ない住民は「平時価格」の物資を求めて近隣の町や村に買出しに行かざるを得なくなった。

公共サービスも影響を受けた。地域の病院やクリニックがコンゴ難民のヘルスケアを受け持つことになったため、診察の待ち時間が一挙に長くなった。難民キャンプには戦闘や避難時に負傷・発病した者に加えて、既往症のある者も多いため。急激な患者の増加で施設と医療関係者の絶対数が不足したのである。

加えて、子供の処遇が懸念された。キゲメ難民キャンプにいる避難民の六〇%以上が十八歳以下の子供である。彼らの教育や活動の場を整えねばならない。



4. 歩く人々

キジバ難民キャンプ

キジバ難民キャンプは古くからリゾート地として知られるキブ湖畔の街、キブエ(Kibuye)から約三三km離れたところに位置する。最寄りの村からキャンプへ行くには土埃の舞う道を車で三〇分近く登って行かねばならない。徒歩や自転車が主な交通手段であるルワンダでは非常にアクセスの悪い場所にある。

一九九六年十一月に開設されたキャンプは、年を経るにつれて様々な機能が整備され、運営も組織化されており、小さく閉じら

泥壁の住居が規則的に並べられ通りを走っている。外観だけを見ると、仮設居住区域である難民キャンプに対して外部の人が持っているであろうイメージとはかなり異なる。

キャンプの人口、約一九〇〇〇人は一九九〇年代後半にコンゴから避難してきた人々とその子供で構成されている。難民キャンプの歴史が長くなるにつれ、様々な社会問題が生まれている。例えば、貧富の差の拡大、子供の教育や就業機会の不足があげられる。これらの多くは教育や就業機会の欠如に大きく関係しているように見受けられる。

貧富の差の拡大と労働

キジバ難民キャンプのマーケットには、アフリカらしい柄の布が数多く吊るされた一角、スポーツメーカーのロゴの入ったスニーカー、トマトやバナナなどの野菜をはじめとする様々な食品・日用品が並べられていた。生鮮食品は国連の食糧配給では支給されない。本来ならば

しかし、地域の学校は既に飽和状態であり、地元学校への受け入れは難しくかった。そこで、国際NGOの一つであるアドラ(Adventist Development and Relief Agency - ADRA)が中心となって学校を組織し、六〇人の教員を雇った。キゲメ地区の協力もあり、二〇一二年十一月には難民の子供達のための学校が開始された。学校は教育の場であると同時に、勉強や遊びを通じて戦乱で受けた心の傷をケアするための場所でもあり、子供達にとって重要な意味を持つ。

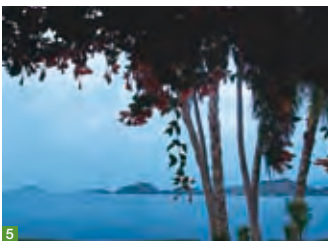


6. キジバ難民キャンプ

難民キャンプの人々が手に入れることのできない品物である。

市場に並ぶ生鮮食品は、支給されたとうもろこしなどを近隣の村で物々交換して手に入れたものである。毎月各人に支給される食料は、とうもろこし十二kg、豆三kg、そして料理油九〇〇gである。年齢に関係なく家族の人数分配給があるので、子供が多いほど多く食料を貰うことができる。余剰分を交換し、市場で売っているのである。

しかし、市場で物を買うことができる人は、キャンプ外の親類縁者から仕送りがある者に限られている。貧富の差は食べ物に限らず、着ている物や収入を得るための手段にも反映されている。多くの子供は支援物資から与えられたのであ



5. キブ湖

れた「都市」のようである。学校や病院、治安維持組織に加えて市場や水道設備のある洗濯場があり、



10. キジバ難民キャンプ

また、中学卒業後の進路にも特に期待できない。以前はカトリック救済サービス (Catholic Relief Service - CRS) が奨学金を出してルワンダの高校や大学で教育を受けられるよう援助していたが、資金のために打ち切られた。それ以降、難民キャンプでは高等教育への道は閉ざされている。

暇を持て余す子供達は売春で小遣い稼ぎをすることが多い。特に売春は少女の



7・8・9. キジバ難民キャンプ

うTシャツなどを着ているが、その中にエスニック柄の小奇麗なアフリカスタイルのドレスを着ている子もみられる。

市場に物はあるが、多くの人は購買力を持たない。難民キャンプ内では仕事に限られている上、生産の手段を手に入れることも困難だからである。資金があれば、ミシンを手に入れて縫製を仕事にできるものもある。しかし、多くの場合どれほど外から支援をもらえるかが難民キャンプ生活に影響している。

このような状況を打開する新しい試みの一つとして、クラフトショップが併設された。キャンプ住人が作ったペーパービーズのアクセサリや、伝統的なバスケット、木彫りの人形などの販売を行っている。ターゲットは視察団などキャンプを訪れた外部の者で、売り上げは製作者に入る仕組みである。ささやかでも労働と賃金を得ることで、キャンプ内での生活改善を図れるように促すことが目的である。

妊娠や出産の個人レベルの問題から、性病などコミュニティとして取り組まねばならない問題まで発展する。キジバ難民キャンプでは、中学生程度になると八〇%の女の子が妊娠・出産しているともいわれ、多くの場合、子供の父親は売春客である。

まとめ

戦火に国を追われた避難民の生活は困難である。それと同時に、難民キャンプの設営と維持は受入国政府の負担になる。新設であれ、成熟した組織をもつものであれ、難民キャンプには問題が多い。新設された難民キャンプの場合、急激な人口の増加に対応しきれないインフラと、食糧供給の不足が最大の問題である。地域住民に難民キャンプの存在を受け入れてもらうためには、土地利用や公共サービスに至るまで細やかな配慮が必要である。

また、半ば恒久的に存在する難民キャンプでは、難民の就労可能性と増え続け

子供の教育と環境

難民キャンプにおける深刻な悩みの一つは子供の処遇である。子供の数が多く事がキジバ難民キャンプの特徴とも言われており、五歳〜十五歳人口が成人人口を上回っている。敷地内に併設された小学校・中学校には各々約四〇〇〇人と約二〇〇〇人の子供が通っている。授業はほぼ毎日行われ、ルワンダ人の教員がキャンプ外から通ってくるが、教えられない者が居ればキャンプ内から雇用される事もある。一見すると教育環境が整っているように感じられる。

しかし、難民キャンプの住人の話によると中学校の場合、三学年で各学年二〜三クラス設置されている。既存の小さな学校設備で在校生が毎日授業を受けることは難しそうである。加えて、文具等が不足していた。ノートや筆記用具を持っている子はほとんどいない。それゆえ、宿題も課されないため、長い放課後が子供に残される。

子供の処遇が問題になる。子供の就学の機会に限られている上に、就労の機会がほとんどない。売春で小遣いを稼ぎ、望まぬ妊娠・出産を繰り返しては未来に希望も持たないであろう。

長期の難民キャンプ生活を支えるには、食料を与えるだけでなく、労働や収入に繋がるスキルと素材を与える援助がもつと考慮される必要があるように見受けられた。難民キャンプに望まれるのは、クラフトショップの試みに見られるような外部への製品販売とそれによる自活システムの構築ではなからうか。

参考資料

- [1] The UN Refugee Agency
- [2] ARC Rwanda ウェブサイト
- [3] News of Rwanda
- [4] ルワンダ外務大臣とのインタビュー (2012年8月22日 於キガリ)
- [5] キジバ難民キャンプ訪問時のインタビュー (2012年8月19日)

Essay Flora

好ましからざる 国際化

—路傍に咲く花の出自—

中野 達司

富士山が世界遺産に登録された。何故富士山が未だだったのかの感ありでもあるが、同時に、世界遺産となつてさらに脚光を浴びることで入山者が増え、負荷がかかり過ぎるのでは、との危惧もいくつかものである。これを機に従前以上に富士山が大切にされることを望む。そして、その登録が文化遺産であつて、自然遺産としては申請もできなかったことを重く受け止められたかと思う。富士山は自然遺産として慈しみたかつたものであつたので、自然遺産での登録申請は断念せざるを得なかつたという経緯がある。

世界遺産としての登録が認められた僅か5日後、その祝賀ムードをぶち壊すようなニュースが報じられた。富士五湖へのブラックバス（オオクチバス）の放流継続に対する山梨県による実質的認可である。ブラックバスは本来そこには分布していない筈の外来種である。ルアーフィッシングの愛好者らによって日本各地の湖沼に放たれ、陸水生態系の破壊者として大なる害が指摘され、駆除の努力がなされている。一旦棲息するに至つたものの駆除など至難であるが、それでも何とか駆除しようとしているその対象を、新たに放流するなど言語道断。今般の世界遺産認定の「富士山」には富士五湖も含まれる。地元の統括者がこの程度であるなら、自然遺産にならなかつたのもむべなるかなである。「海外では、外来種問題への関心の高さで文化の成熟度がわかる」とさえ言われる。世界遺産の足元で生態系の破壊を容認する県に、富士山の魅力を語る資格はない。」と新聞で識者が厳しくコメントしていたが、全くにして同感である。

意図的に導入されて各地で増殖しているブラックバスの害は広く知られている。自然の状態で分布していない種(species)を人為によって存在せしめること自体、自然を侵すことである。さらにその種は、往々にして元々そこにいた別の種の存在、存続を危うくする。ブラックバス（それに、やはり外来種であるブルーギルが加わつて）の侵入は大いに他の生物に影響を与え、侵入者に生態的地位を奪われることによって、さらには捕食されることによって、その棲息域での個体数が激減している種は多数あり、そして絶滅したと思われる種さえある。ブラックバスやブルーギルの被害著しい琵琶湖では、魚類など外来の水生生物の減少が由々しき問題となつているのみならず、カワウ（鶺鴒）が異常繁殖し、上代より歌にも詠まれてきている景勝地、竹生島の松がその糞で枯れるに至つている。ブラックバスなどの従来存在しなかつた餌を、特に本来は餌不足であつた筈の冬に、鶺鴒がふんだんに利用できるよつたことが、その大量繁殖をもたらした

たとえられ、竹生島の松が鶺鴒の糞まみれになつてしまつていたのである。

象ではない。

1. ナガミヒナゲシ
2. ムラサキツユクサ
3. オニノゲシ



外来種の問題はブラックバスに限らない。例えば、一昨年（2011年）世界遺産に登録された小笠原（こちらは自然遺産！）ではグリーンアノールという外来種のトカゲ類が在来生物を捕食し、固有種の存続を脅かすまでになつており、その駆除が懸命に行われている。多摩川は、今や、ピラニアなどのアマゾン川の魚や世界各地にルーツをもつ外来生物が棲息するよつになつており、「タマゾン」川などと呼ばれるに至つている。外来種が問題となつている例は枚挙に暇がなく、読者の居住地にもアライグマやインコといった外来生物が出没しているかもしれない。そして、外来生物は動物のみに非ず、外来植物も我々の周りに当たり前にはびこつており、動物以上に身近に見られる筈である。（ここでことわつておかなければならないが、一般に外来種が取り沙汰される時、それは野生の状態のものについてであつて、人に飼われたり栽培されたりしているものは対

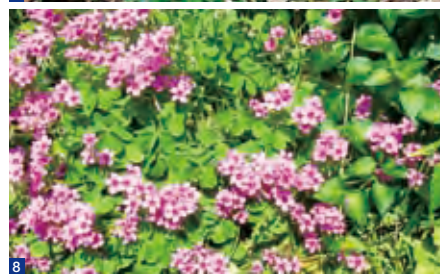
本年（2013年）5月のある日、筆者の自宅から勤務先である亜細亜大学までの通勤路の道端に咲く野草を見て歩き、特に目についたもの（ある程度の背丈のあるものなど）を写真におさめた（写真1〜写真5）。1:ナガミヒナゲシ、2:ムラサキツユクサ、3:オニノゲシ、4:



7. ショカツサイ

4. ユウゲシヨウ

ユウゲシヨウであり、全て外来種である。そして5は「タンポポ」であるが、正確にはセイヨウタンポポで、名前が示すとおり、これも外来種である。(因みに写真



5. セイヨウタンポポ 6. カントウタンポポ 8. イモカタバミ 9. アメリカフウロ

6は他所で撮影した、在来種のカントウタンポポ。)意図して外来種を求めて歩いたわけではなくても、咲いていたのは外来種ばかりであった。通勤コースを少々外れる所にまで足を伸ばすと、やはり外来種のシヨカツサイ(写真7。ムラサキハナナなどの別名あり)、イモカタバミ(写真8)が咲き誇り、やや控えめにアメリカフウロ(写真9)も花をつけていた。ことほど左様に外来種が野草界に君臨しているのである。(外来種他に、移入種、侵入種、さらに植物の場合は帰化種と云うことがあるが、何れも種の部分に生物などを置いて用いられる。)

そもそも今日、日本の都会の野草の8割は外来種とも云われるくらいであるので、上段で述べたことは驚く程のことではないかもしれない。また我々が当たり前に日本の植物だと思っているものが、実は外来種であったりもする。史前帰化植物と云われるものがあって、人の移動や農耕の伝播に伴って新しい土地に分布するようになったのだそうだが、日本でも春秋の七草に数えられているような馴染み深い植物にもその例が見られる。また有史以来、特に江戸時代末期以降にかなりの外来種が我が国の野生植物相に加わっている。オオイヌノフグリは春、日本中至る所の道端で碧紫色の花を

咲かせ、そのユーモラスな名前(フグリって何だろう?)と共に親しまれているが、これは明治時代に入り込んだ外来種である。太宰治をして「富士には月見草がよく似合ふ」と言わしめた植物(正確にはツキミソウではなく、オオマツヨイグサの類だろうと推定されている)は、やはり明治期に本邦に渡って来たものである。

生物は移動する。であればこそ、新しく海中から顔を出した島にもやがて陸生生物が分布するようになる。海は陸生生物の移動の障害となるが、生物によっては自身の飛行や遊泳の能力によって、さらには気流、海流、他の生物(鳥)に運

ばれて、空路や海路で海をも越える。ましてや陸路であればである。このような移動の結果もあって世界の生物相が成立していたところに、自然の状態ではあり得ない移動が人為によって起こされるようになり、前世紀後半以降その傾向著しく、所謂「外来種問題」が看過されるべきでない深刻な問題となっている。しかし、為政者や国民に必ずしもその深刻さが理解されず、そのような人々、特に政治家の経済優先志向、少なからぬ国民の無関心の前に、自然保護に取り組む、心ある人々が空しい思いをしているのが実情である。社会全体の、そして少なくとも政策決定に与る者の、科学リテラシーが向上すれば(ドイツのメルケル首相ほどのレベルは求めないまでも)、かなり改善が望める問題だが…。

動物の外来種は在来種の捕食という害(これが害の全てではないが)があつて、その問題たるが解り易いが、植物の場合は何が問題か。既述のとおり、自然の状態では分布していない筈の生物を人為によって存在させること、それ自体が自然を侵すことであり、問題である。そして種によっては在来種の生態的地位を奪い、駆逐してしまうこともある。植物相に不自然に新顔が加わるだけでなく、旧来の構成員を消してしまうのであり、人為による自然の改変、破壊となる。ただ、人類は自然を改変、破壊して文明を築いてきたのであり、我々の「衣食住」の、特に「食」を支える農(牧)業は、植物(動物)を元の分布域から他の土地に移動させて栽培(飼育)して成立している。コムギ、イネ、トウモロコシなどの基幹穀物に限らず、幾多の生物が野生種の原産地に留まることなく世界の至る所で栽培(飼育)され、世界中の人々の大事な食料となっている。ここで甚だ人類の勝手ながら、「食」に加えて鑑賞などの他の目的の場合も含めて、栽培(飼育)のための生物の移動はよしとしよう。それらが人に管理されている限りは。しかし、移動先で野生となるものについては話が別である。それは人に自然を守る心があれば避けられる自然の改変となるからである。自然を改変して文明が成り



10. クズ

立ってきているとはいえず、改変せずに済む自然まで壊してはならない。外来種が野生の状態では存在するに至るのは、以下のような場合が考えられる。(1) 外来種を意図的に自然界に放つ場合、(2) 栽培や飼育のために持ち込まれた外来種が人間の管理の及ばない状態になり(逸出と云う)野生化する場合、(3) 何かに交じって移動し、移動先で野生の状態で繁殖するようになる場合、の三つである。本稿に登場したものは、ブラックバスは(1)、セイヨウタンポポは(2)、グリーンアノールは

(3) の例となるが、何れ劣らず厄介者である。

外来種は世界的な問題であり、日本から他国に渡った生物が野生化して迷惑がられてもいる。クズはその繁殖力の強さはつとに知られているが(写真10は亜細亜大学近くの玉川上水端に繁茂する様)、その根が葛根湯という薬となり、また葛餅や葛きりの原料にもなっており、古来わが国では特に嫌われてはいなかったと思われる植物である。しかし、クズは日本から米国に持ち込まれ、大繁殖し悪者になっていくと聞く。他にも例は数多挙げられるが、ニュージーランドの海では日本起源のワカメが問題視されているようだ。

外来種の問題は必ずしも生物が国境を越えて起こるわけではない。自然の状態ではあり得ないような人為による生物の移動が国内で起こっても問題であり、そのようにして移動した生物もまた外来種(国内由来の外来種)である。また、同じ種であっても異なった分布域のものは異なった遺伝的特性を有することがあり、

種として可憐に咲く野辺の花に罪はない。しかし、それを導入する人間には罪ありである。

最後に「タンポポ」について。今日、日本の随所で当たり前に見られるのはセイヨウタンポポ(写真5、写真11)である。しかし、日本には在来種の「タンポポ」もかつて広く分布し、東京にあつてはそれはカントウタンポポ(写真6、写真12)であつた。カントウタンポポも今日、種としては健在であるが、市街地で見られるのは殆どがセイヨウタンポポである。この両者、一見して区別はつきにくい(写真5、写真6をご覧あれ)、花の基部の総苞片と云われる部分に決定的な違いがある。写真11のセイヨウタンポポの花の基部に緑色の片が「ささくれ」がめくれたように反り返っているのがお判りと思うが、写真12のカントウタンポポでは「ささくれ」はめくれていない。(亜細亜大学から2キロほどの距離のところ、今となっては貴重なこの在来種の自生地があり、本稿所載の写真はそこ

それらを交雑させることになるような人為による移動は本来あつてはならないのだが、現実には大いに起こっている。ゲンジボタルの例などが知られているが、そのような交雑は遺伝子汚染を引き起こしており、憂うべきことである。

人や社会の国際的な、もしくは地域間の交流はけっこうだが、野生生物にあっては願ひ下げである。好ましからざる国際化と言いたい。もちろん、国内での野生生物の不自然な交流も困る。世界中でこのような由々しき事態が進行しているのが現実であるが、ただ手をこまぬいてはならない。これ以上事態を悪化させないよう人智が尽くされるべきである。我が国では「特定外来生物法」が2006年から施行され、同法対象の外国産生物の持ち込みを規制しているが、けっこう十分ではない。冒頭紹介したブラックバスはその対象となるが、その放流を県が認めるなどということがまかり通っているのが実情である。少なくとも新たに外来種を持ち込み、野生化させるようなことは到底許されない。外来

で撮影されたものである。なお、セイヨウタンポポと見なされるものは実際のところ、在来種との雑種である場合が殆どであるとも云われている。

セイヨウタンポポは、その旺盛な繁殖力で近縁在来種の脅威となつていると云われるが、その繁殖力の強さは単為生殖をすることにあり。さらに株の一部からも増える。筆者は国内の行く先々で「タンポポ」を見かける度に、在来種か外来種かのチェックをしているが、市街地に見られるものは圧倒的に外来種である。本年(2013年)4月、神奈川県内の所謂里山地域を同好の仲間と植物観察しながら歩き、例によって「タンポポ」を見かけるとチェックを怠らなかつた。結

果は28対17で外来種の勝ち。カントウタンポポが見られた17か所は何れも「山中」で、人家の近くや畑のある所はセイヨウタンポポの独壇場であつた。セイヨウタンポポは環境省の要注意外来生物に指定されている。

なお、写真13は秋に亜細亜大学近くの空き地を写したものであるが、目立つ植物はエノコログサ以外は殆ど外来種である。後部に広がる黄色の植物群はセイタカアワダチソウ、その前の葡萄状の実の下がるのはヨウシュヤマゴボウ、真ん中右あたりに白い花が並んでいるのがヒメジョオンである。そして、左手前では季節外れのムラサキツユクサが咲いており、外来種に席卷されているの感あり。



11. セイヨウタンポポ



12. カントウタンポポ



13. 大学近くの空き地の植物

首都の銅像

高山陽子

A BRONZE STATUE STORY

1. 西郷隆盛像
上野公園

上野の西郷どんは、東京を代表する銅像である（写真1）。この銅像は日本の中でも比較的古く、一八九八（明治三二）年に完成した。西郷隆盛は西南戦争で国賊となったものの、国民からの人気が高かったため、一八九九（明治二二）年の帝国憲法発布に際して名誉が回復され、同時に銅像建立計画が立ち上がった。楠木正成像と同様に、制作の中心となったのは当代一の彫刻家、高村光

雲であり、犬のツンは後藤貞行が制作した。

犬を連れて着物一枚を羽織ったラフな西郷隆盛像は、銅像としてはかなり珍しい。銅像はたいてい、偉人や英雄を称えるために作られるため、「偉そうな」風貌をしている。例えば、ロンドンのネルソン記念柱は、トラファルガーの海戦に勝利したネルソンを称えるものであり

（写真2）、ベルリンのビスマルク像はドイツ統一に貢献したビスマルクを顕彰するために建立された。また、イタリア統一後の最初の国王であるヴィットーリオ・エマヌエーレ二世の像は巨大な騎馬像の形でローマを見渡すように建てられた（写真3）。近代国家の幕開けとともに首都には雨後のタケノコのように銅像が出現した。日本も例外ではなく、二〇世紀初頭の東京は銅像であふれかえり、



2. ネルソン記念柱 ロンドン



3. ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世像 ローマ

大村益次郎像は彫刻家の大熊氏廣が制作した。大熊は工部美術学校彫刻科を卒業した後、大村像の制作を宮内省から依頼され、ローマとパリに渡って彫刻を学んだ。帰国後、大村像の制作に取り掛かったが、本人の写真や肖像画がなかったため、大熊は大村夫人や大村の妹を訪ね、容貌についての情報を収集した。一八九一（明治二四）年、大村の石膏像が完成し、小石川砲兵工廠で鑄造された。大村像は、花崗岩の土台に三条実美の碑文を刻んだ台座を重ねた上に置かれた。大村は片手に双眼鏡を持つ姿で描かれ、その視線は上野の方向を向いている。上野は、江戸城無血開城後、彰義隊と名乗った幕府軍が、大村益次郎と西郷隆盛が率いる新政府軍に抵抗した場所である。新政府軍は、一八六八（慶応四）年五月一日、一斉攻撃を開始し、一日で彰義隊を倒した。大熊は、このときの大村の姿を描いたのである。



6. 楠木正成像 皇居外苑

計画に参加し、河内赤坂城で挙兵した。一三三三年、正成が幕府軍を破ると、足利尊氏は京都の幕府軍を倒し、新田義貞は鎌倉の北条高時を討ち取った。こうして一四〇年続いた鎌倉幕府は消滅し、後醍醐天皇は建武新政をはじめた。まもなくして尊氏が反旗を翻すと、一三三六年、後醍醐天皇は吉野へ逃れ朝廷を開いた（南北朝時代）一三九二年）。正成と義貞は尊氏討伐に向かうが、正成は兵庫の湊

川で破れて自害し、義貞は福井で戦死した。明治になると南朝が正統と認定され、後醍醐天皇に尽くした楠木正成は模範的な「忠臣」と見なされた。そこで、明治政府は皇居外苑に設置する銅像として楠木正成がふさわしいと考えた。正成像の原型は彫刻家の高村光雲が制作し、馬は後藤貞行と新海竹太郎が制作した。銅は

各新聞には、もう首都に銅像はいらないという意見まで出された。狭い意味での銅像はブロンズの像を指すが、広い意味では屋内外の公共の場に建てられた記念碑全般を指す。ブロンズ製ではなく、コンクリートや大理石の像ももっぱら銅像と呼ぶ。ただし、こうし



4. 道祖神 信濃本町駅

た意味での銅像の中には明治以前から道端に作られてきた地藏や道祖神（写真4）は含まれず、また、鎌倉の大仏も含まれない。銅像は、主として実在した人物あるいは実在したとされる人物を記念するものであり、日本ではその習慣は明治時代に始まった。



5. 大村益次郎像 靖国神社

最初に日本に登場した銅像は、金沢兼六園におけるヤマトタケル像であるとされる。一八八〇（明治一三）年、西南戦争（一八七七）において犠牲になった石川県人を慰霊するために、「明治記念之標」としてヤマトタケル像が建立された。ヤマトタケルは『古事記』や『日本書紀』に描かれている半ば神話上の人物であり、様式も従来の仏像を模したものであった。西洋式の銅像は、一八九三（明

治二六）年、靖国神社に建てられた大村益次郎像において初めて日本に本格的に導入された。靖国神社は、幕末から明治の戦争で死亡した人々を祀る東京招魂社として建てられた。東京招魂社に先立って各地で死者を祀るために京都などに招魂社が作られた。一八七九年、靖国神社と改称され、東京招魂社で、臨時大祭が実施され、西南戦争の死者が祀られた。一八八二（明治一五）年、遊就館が開館し、翌年、参道に日本陸軍の父と呼ばれる大村益次郎像が建てられた（写真5）。



9. 有栖川宮熾仁像 有栖川記念公園

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけ、東京には多くの銅像が建立された。一九二八（昭和三）年には『偉人の佛』という銅像写真集が出版され、日本国内の六百ほどの銅像の写真が掲載された。数多くの銅像の中でも、西郷隆盛や楠木正成などの「アイドル級」の銅像はごくわずかであり、最も数が多いのは、地域の発展に貢献した実業家と地方功労者であり、全体の三割ほどを占めた。

現在、銅像であふれる首都の景観を目にするのではない。それは、一九四一（昭和一六）年に発布された金属類回収令によって多くの銅像が供出されたためである。このときに供出の対象外となったのが、西郷隆盛や軍神と称えられた広瀬武夫などの「アイドル級」の銅像と、小松宮彰仁像や有栖川宮熾仁像、有栖川宮威仁像、北白川宮能久像などの皇族の銅像であつた。ただし、戦時供出を免れた皇族の銅像は戦後、移動を余儀なくされたものが多い。

例えば、有栖川宮熾仁像は、一九〇三（明治三六）年千代田区の旧陸軍参謀本



7. 新田義貞像 分倍河原駅前

愛媛県に銅山を保有していた住友財閥の当主、吉左衛門が献上した。楠木正成像は、すぐに東京の名所の一つとなった。なお、楠木正成と共に戦った新田義貞の像が建てられたのは、一九八八年で、場所は鎌倉街道の分倍河原古戦場近くの分倍河原駅前である（写真7）。

品川弥二郎像、太田道灌像などがある。また、上野公園には野口英世像、ジェンナー像、滝廉太郎像、小松宮彰仁像、ポードワン像などが建てられた。

和氣清麻呂は、楠木正成と同様に「忠臣」として知られる。奈良時代末期、和氣清麻呂は、称徳天皇に取り入り自ら皇位に就こうとした僧侶の弓削道鏡の企みを阻止した。この業績は、尊皇攘夷が高まる幕末に再評価され、明治期には京都の護王神社に祀られた。銅像は一九四〇（昭和一五）の紀元二六〇〇年を記念して建立された。品川弥次郎と大村蔵は幕末から明治期に活躍した人物であり、皇

居周辺には明治国家のシンボルとなるような人物の像が集中した。

一方、上野公園には野口英世、滝廉太郎、ジェンナー



8. 和氣清麻呂像 気象庁前

などの知識人の像が多く見られる。上野は、江戸時代、徳川家の菩提寺として繁栄した寛永寺の土地であった。上野戦争で焼け野原になった上野は、オランダの軍医ポードワンの提案で日本初の公園に生まれ変わった。上野公園では、内国勸業博覧会が開催された後、東京国立博物館や国立科学博物館、上野動物園など、大規模な教育施設が建てられた。種痘の発明者であるジェンナーの像は、一八九六（明治二九）年、種痘の発明百年を記念して制作された。また、野口英世像は、故郷の福島県出身者らの提案で、一九五一（昭和四七）年に国立科学博物館前に建てられた。

部前に建立されたが、道路拡張のため一九六二（昭和三七）年、港区の有栖川宮記念公園へ移設された（写真9）。この銅像も大熊氏廣が制作したもので、当

時の日本の騎馬像としては最高傑作であるといわれている。また、弟の有栖川宮威仁の像は、もともと築地の海軍大学校の前にあったが、一九八四（昭和五九）



10. 有栖川宮威仁像 天鏡閣

年、福島県の猪苗代湖近くの天鏡閣に移設された（写真10）。この銅像は当時を代表する建築家である伊東忠太が制作にあたり、ロンドンのネルソン記念柱をモデルにしたという。

銅像の移動もまた首都の歴史の一部を物語っている。万世橋前の広瀬武夫像のように、戦後の都市計画の中であっけなく撤去されたものもあれば、移設して新しい名所を作る銅像もある。撤去されるか移設されるかは、その人物の同時代的な評価に左右される。かつて英雄あるいは軍神と呼ばれた人物であっても、時代の要請に合わなければ撤去されてしまうのである。建てられた当時から現在に至るまで、上野の顔であり続ける西郷隆盛像は、首都・東京の激動の歴史を物語る存在であると同時に、激動の歴史を静かに眺め続ける存在でもある。

西郷どんが、つんつるてんの着物ではなく立派な軍服を着て、馬に跨っていた姿であったならば、これほど人々に愛される銅像ではなかったかもしれない。

あ

る企業の人事部長によれば、企業が大学に期待することは、「徹底的に考える力、見えない課題を解決する力、解がないところから利害関係者とのコミュニケーションを通して解を見出せる力、を身に付けさせること」だそうである。「国際問題に、たった一つの答えしかないと思っではいけない」（だから「真実はいつも一つ」というコナンくんの口癖は不正確！）、「利害の異なる紛争当事者の間で、お互いに納得がいく解決が可能となる『バランスを取る』ことを身に付けるべき」と常に学生に言ってきた筆者は、同部長の意見に大いに意を強くした。

徹

徹底的に考え、解がないところから解を見出す練習ができるのは、ゼミの時間である。だから筆者は、ゼミの授業では自分が話すことは極力避け、最後の10分間だけコメントする時間をもらうが、それ以外は学生が自由に発表し、質問し、議論するように仕向けている（80分間黙って学生の議論を聞くといいことは、教師にとっては、実は大変な

ゼミナール紹介

秋月ゼミ

「解がないところから解を見出す努力」

秋月弘子

修行でもある）。

も ちろん、最初から学生が議論できるはずはない。それなりの工夫が必要である。

工夫1 学生を解き放つ

専門ゼミ（3年生）の初回授業では、問題を与え、班ごとに答えを導き出させる。たとえば、「国際宇宙ステーション（ISS）『きぼう』の中で、日本人宇宙飛行士若田さんが殺害されたと仮定します（若田さん、ごめんさい）。さて、この殺人事件について犯人を捕まえることができるのは、どの国でしょうか？根拠を示して答えなさい」。国際法の教科書、国際条約集、インターネットに繋がるPCなどは用意するが、それで足りない場合には、図書館でもどこへでも行って調べて来いと、学生を解き放つ。約1時間後に再集めた学生は、宇宙法、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、国際宇宙基地協定、「きぼう」の管理権、刑事管轄権などなど、議論を通じてかな

り解答に近づいていく。そこには、知らないことを調べ、仲間と議論し、ちょっとだけ分かるようになって、楽しそうな顔がある。

工夫2 議論の仕方を学ばせる

学生に議論させるだけでは、議論が深まるわけでも、専門性が高まるわけでもない。だから、議論の道筋(論理的な議論の仕方)を分からせるために、実際にあった国際裁判事例に関する国際司法裁判所(ICJ)の判決を読ませ、議論させる。①何が問題の本質なのか、各紛争当事国の主張を確認し、論点を整理する、②その問題に関連する法を見出し、その内容を確認する、③裁判所は、各論点について、どの法をどのように適用し、どのような結論を下したか明らかにする、④その後、紛争は実際に解決したか確認する、ことを各班で行ったうえで、全員で議論する。時には、裁判所の判決内容を批判する論客もいる。論点を噛み合わせることで、判断基準は法であること、を



憲法改正の是非についてのディベートの様子。資料を持って作戦タイム。審判団は、両立場の立論、質問、反論などを板書し、議論を噛み合わせていく。

学生は少しずつ理解していく。と同時に、法だけで問題が解決するわけでもない理不尽さ(?)も学生は感じているようである。

工夫3 タイムリーな問題を議論させる

議論することに慣れてくると、学生はもっと議論したがる。そこで、領土問題、憲法改正問題など、今まさに起こっている問題についてのディベートも時々取り入れる。テーマは、学生が自ら選ぶ。1週間情報収集を行って、ディベート当日に賛成、反対、審判団のチームに分ける。ディベートは勝敗が分かれるからか、学生は実に楽しそうに白熱した議論を繰り広げる。審査時間を取った後に発表される審判団の講評は、公平で、辛辣で、的を射るコメントが多い。何回か他のゼミとのディベートも行ったが、ゼミの威信をかけた(?)ゼミ対抗ディベートは、ゼミ内ディベート以上の盛り上がりを見せる。

工夫4 楽しく学ばせる

勉強は教室の中だけで行われるのではない。学外に飛び出して、見たり、聞いたりしたほうが楽しいし、鮮明に記憶にも残るだろう。これまでに、模擬国連(学生が、各国連加盟国の大使に扮し、模擬外交交渉を繰り広げながら国際問題について勉強する活動)の全日本大会で他大



総合ゼミ生(4年)の集合写真。留学中、就活中の仲間も写真で参加。

学生の活躍を見学したり、国連広報センターの情報検索セミナーに参加したり、府中刑務所を見学して外国人の犯罪や受刑者の人権状況などについて学んだりもしてきた。時には、参考になる映画を見に行こうと学生に声をかけたものの、誰一人参加せず、筆者一人で寂しく映画を見たこともあった。それでもめげずに、学生が参加すればその都度、勉強の後に楽しい交流の時間(つまり「ゼミ飲み」)を設けて、楽しく議論することを心がけている。

楽しく、かつ、専門的に学ぶ工夫は、まだまだあるだろう。領土紛争解決のための模擬交渉も、商業捕鯨の是非に関する模擬裁判も、就活のための模擬面接も、やってみたいことである。見学したいところも沢山ある。学生の顔ぶれを見て、彼ら/彼女らの興味および能力を推し量りつつ、また、だんだん減りつつある自分自身の気力と体力を無理やり引きずり出しながら、「解がないところから解を見出す努力」は、学生とともに、今日も続く。

Fieldwork in Korea

2013年夏季 韓国フィールドワーク

異文化の中での「サバイバル訓練？」

金 柄徹



1. はじめに

筆者が担当する専門ゼミ(3年生)では、2000年度から夏休みを利用して、韓国(主にソウル)で1週間ほどのフィールドワークを行っている。すでに十数年間実施しているが、フィールドワークそのものは正規授業ではなかったため、実施の準備や安全管理などの面で困難な点もあった。しかし、航空券や宿の手配をはじめ、日程に関わるすべての事務をゼミ生の皆と協力して行うことで、社会に出れば当然のことであるが、ゼミ生たちは全日程を自主的に管理し、それぞれの行動に責任感を持ちながら、互いに助け合う「経験」を積むことができたと思う。そして、何よりも参加者の皆が「手作りフィールドワーク感」を楽しむことができたのではないかと思いたい。

本稿は、今年度を実施したゼミでのフィールドワークの様子を紹介することで、ベールに包まれていたかも知れない日程と中身について、関心と理解を広められればと願っているものである。

2. 事前準備とテーマ設定

事前準備は専門ゼミIの後半の時間と授業外の時間を利用して、行った。

まず、グループ分けとともにフィールドワークにおける各自のテーマを決めることから始め、目的・仮説・日程・調査方法などを中心に「研究計画書」を書かせた。そして、「研究計画書」で立てた仮説を検証できる「アンケート用紙」(和文)を作成し、最終的には韓国語に翻訳した「アンケート用紙」(韓文)を完成させた。調査方法としては、同様のテーマで、8月中旬に韓国で、8・9月中旬に日本で、それぞれ50名ほどの人にアンケート調査を行い、比較することになった。

今年度のゼミ参加者は19名で、研究テーマは以下のように多岐にわたっているが(「テーマ名」(名前))、各々が若者らしい関心であると思われる。

「日本と韓国の学校教育」(屋代)、「日本の宗教の浸透」(阪本)、「日本と韓国の大衆音楽の価値観」(林)、「日本と韓国のファッションの違い」(吉元)、

・第1日目：8月17日(成田→仁川)

成田からの飛行機で仁川(ソウル)空港に到着した(写真1)。空港バスを利用し、宿のある明洞まで移動。ホテル近くで、夕食を取った後、夜の反省会と懇親会を行った(写真2)。

ホテルは、6年前から利用しているところで、立地も構造も海外からの若者が利用しやすい環境となっている。2〜6人部屋があり、部屋の中にキッチン・シャワー・トイレ・洗濯機などが完備されており、1泊約3000円で利用できるのも魅力的である。



1. 仁川空港

「日本人と韓国人の海外経験」(庄條)、「日本と韓国のドラマ」(武田)、「日本と韓国の結婚観」(高木)、「日本と韓国の食文化事情」(玉手)、「学習態度の日韓比較」(三浦)、「日韓のエンターテインメント業界」(石原)、「日本と韓国のアルバイト事情」(桑原)、「日本と韓国の大学生活」(鈴木)、「日本と韓国の若者の音楽」(園部)、「日本と韓国の映画事情」(柯)、「日本と韓国の映画」(山本)、「日本と韓国の食文化」(小野澤)、「日本と韓国の家族関係」(落合)、「日本と韓国のファッション文化」(有賀)、「サッカーの日韓戦」(山下)。

3. 日程と調査

2013年8月17日(土)〜8月23日(金)の予定で、韓国ソウルでフィールドワークを行った。調査の日程には、アンケート調査だけでなく、韓国の文化や現状を知るための見学も含まれている。以下では、日程に沿って写真を交えながら紹介していきたい。



2. 初日の懇親会

・第2日目：8月18日(見学1日目)

ホテルを出発し(写真3)、ソウルの代表的繁華街である明洞に行った(写真4)。そして、昼食として、人気の高い麺料理の一つであるジャジャ麺を楽しんだ(写真5)。韓国のジャジャ麺は韓国人に愛されている韓国風中華料理で、4月14日に恋人のいない若者が黒い服を身にまとい食することで知られている。

その後、都心を歩き、朝鮮王朝時代の王宮の一つである景福宮を見学した(写真6)。敷地の中には民俗博物館があり、日本文化との共通点も多く発見できた。そして、韓国伝統茶のお店やお土産屋が立ち並び仁寺洞を通り(写真7)、初の地下鉄にも乗り(写真8)、本学と提携校の慶熙大学まで移動した(写真9)。大学前で留学中の先輩二人と交流し、二人に予約してもらった焼き肉屋で本場の焼き肉と韓国焼酎を味わった(写真10)。そして、2次会として大学街のチヂミ屋で、チヂミとマッコリ(濁り酒)を食した(写真11)。



3



4

3. ホテルの前
4. 明洞にある韓国の交番



5



6



7



9



8



11



10

5. ジャジャ麺は黒い 6. 王宮の中
7. 仁寺洞にあるハンブル表示のスターバックス
8. 韓国の地下鉄 9. 韓国の自動販売機
10. 定番焼き肉のサムギョプサル
11. 大学街のチヂミ屋



12. 清溪川でのアンケート調査 13. 明洞でのアンケート調査
14. NANTAの劇場 15. 慶熙大学構内でのアンケート調査

・第4日目：8月20日（アンケート調査2日目）
全グループが慶熙大学構内で、アンケート調査を実施した（写真15）。前日の経験が生かされ、また、同年代の大学生は優しく応じてくれる中、調査が上手く進んだ。50枚という目標が達成できた人はグループの他のメンバーを手伝うことで、その日の午後にはすべてのメンバーが調査を無事終了することができた。

フィールドワークの期間中は、早朝のミーティングと夜の反省会・懇親会を欠かさず行ったが、この日の反省会は重い雰囲気であった。しかし、他のグループのメンバーも似たような経験をしたことを確認すると、安心し、苦痛から少し解放される。また、上手くアンケート調査ができた事例を共有することで、翌日へのヒントを得る。最後には、懇親会で韓国の飲酒文化を体験しながら、気を休めることもできた。

夕方は皆が明洞で集合し、韓国を代表する公演の一つであるNANTAを鑑賞した。NANTAは韓国の伝統的リズムを現代風にアレンジしたもので、世界各国でも演じられた人気のパフォーマンスである（写真14）。

・第3日目：8月19日（アンケート調査1日目）
グループで分かれ、清溪川・明洞などで、通行人を対象にアンケート調査を行った（写真12・写真13）。異国の地で、アンケートをお願いするには相当の勇気が要る。韓国語が多少話せる学生もいるが、多くがたどたどしい言葉で声をかけ、断られたり、無視されたりもする。挫けて相当落ち込んでしまう場合もあるが、グループの仲間から激励され、立ち直る。そして、アンケートに答えてもらった時はとても喜ぶ。話を通じない時は、英語やジェスチャーでコミュニケーションをとる。このように、失敗と挫折を経験し、それを乗り越える術を知ることともフィールドワークの目的の一つであるが、やはりハードな訓練には間違いない。

17. 最後の懇親会



4. おわりに

毎年の総合ゼミ(4年生)の最終日に、大学在学中の思い出を語ってもらう時間を設けているが、「出会いの広場(鬼怒川での新入生オリエンテーション)」や「LAJAP(5ヶ月間のアメリカ留学)」とともに、「フィールドワーク」はとても「強烈な記憶」として取り上げられている。同級生とはいえ、家族以外の他人と1週間を異文化の中で、しかも同じ部屋で過ごすのは、経験の少ない若者にとっては大変きついことである。しかし、互いに協力しながら厳しい日程や課題をクリアーしていくことで、皆がたくましく成長し、また強い絆で結ばれていくことを、毎回見受けられている。そして、1週間という短い時間ではあるが、書籍やマスコミなどの資料からは知ることが、味わうこともできない臨場感や現地の人々と

の触れ合いを通し、自分の「先入観」を改め、幅広い(リグロバルな)視野を身につけるきっかけにしていると実感している。安全管理の面で、引率教員としてフィールドワークの最後まで気を抜くことのできない重圧を感じながらも、毎年フィールドワークを実施し続けてきた理由がそこにある。筆者にとって学生とのフィールドワークは、自分の「若さ」が続く限り実施したい、恒例の楽しみとなっている。

幸い、来年度からは「多文化フィールドスタディー」という、多文化コミュニケーション学学科の正規科目となり、リスク管理や経費面において大学の支援が受けられることになるので、大いに感謝している次第である。

・第5日目：8月21日(見学2日目)
早朝、ホテルを出発し、バスでJSA(板門店共同警備区域)に向かった。JSAは朝鮮戦争の休戦会談が行われたところで、文字通り、南北が共同管理しており、南北の兵士を至近距離で同時に見ることが出来る唯一の場所である。

周知のように、1950年代に朝鮮半島では戦争が勃発し、国と民族が南北に分断される悲劇が起きた。朝鮮半島では今も休戦状態が続いており、韓国と北朝鮮は「地上最後の分断国家」ともいわれている。そうした背景の中で、現在韓国ではすべての成人男性に約2年間の兵役の義務が課されている。筆者も、先述のJSAで、20代の2年半を兵役に服した経験がある。

JSAは南北分断の象徴的な場所であるが、外国人に見学が許されており、日常とは違う、戦争や分断の重い雰囲気を感じることができる。と同時に「平和」についても改めて考えさせられる空間でもある(写真16)。

・第6日目：8月22日(自由日)
ハードな日程の中で、個人行動は制限されているが、この日だけは、門限の17時までソウルを自由に見回ることができる。美術館巡り、ショッピング、映画鑑賞などに時間を使う人が多かった。

夕方はホテルのキッチンを利用し、買って来た材料で、皆で「ブデチゲ」という韓国の鍋料理を作って、最後の晩餐会を開いた。その後は、反省会と懇親会。懇親会では、グループ毎に韓国での出来事や体験に基づいた出し物(劇)を披露し、韓国での最後の夜を楽しんだ(写真17)。



16. JSA

・第7日目：8月23日(仁川→成田)
筆者は続きの公務があり、もう少し滞在したが、全員無事に日本に戻った。

学部行事報告

グローバル人材育成

「行動力あるアジアグローバル人材」の育成に向けて

新井敬夫

本学部の教育が文部科学省の平成24年度「グローバル人材育成推進事業」に採択されたことを受け、学部は具体的に「行動力あるアジアグローバル人材」の育成に取り組むことになりました。

原点までさかのぼると、亜細亜大学は開学時から海外への志向が強かった大学だといえます。戦前は、興亜専門学校との名称の下でアジアを中心とした外国研究を進めていました。国際関係学部は、経済学部国際関係学科が独立する形で、平成2年に開設されました。そして、平成24年に多文化コミュニケーション学科

を新たに開設し、世界に羽ばたく人材育成のための教育体制を整えました。現在、国際関係学部には、〈経済・ビジネス〉〈平和政策〉〈国際協力〉の3コースを擁する国際関係学科と、〈多文化社会協力〉〈観光多文化〉〈多文化多言語〉の3エリアに地域言語の科目群などを加えた多文化コミュニケーション学科が設置されています。これらの6コース、エリアはいずれも科目群であり、専攻という意味でのコースではありませんが、漠然と「外国のことを学びたい」という学生に一定の学びの指針を提供しています。国際関係学部の学生には、学際的かつ総合的に、しかし針路を見失わずに学んで、学習の成果を出していただきたいと考えています。

さて、「行動力あるアジアグローバル人材」の育成は、この両学科にまたがる教

育事業として、平成24年度から28年度まで実施されます。まず、「行動力ある人材」とは、たとえ厳しい環境にある外国でも、そこでたくましく、自立して活躍できる人材ということです。そして、「アジアグローバル人材」とは地理的区分としてのアジアのみで活躍するという意味ではなく「アジアの中の日本人としてのアイデンティティを備え、日本やアジアとの関係の中で一体化しつつある世界を把握し、国内外で活躍できる人材」ということです。この意味からすれば、国内にも「行動力あるアジアグローバル人材」の活躍の場は十分にあります。もちろん、アメリカにも、アフリカにもその場はあります。

さらに細かい資質・能力をあげれば、英語で仕事ができ、現地語も話せて、異なる文化的背景を持つ仲間との協調性



1. アリゾナ州立大学への留学の様子
2. 海外フィールドワーク（フィリピン）の様子

があり、一方で主体性とリーダーシップもあり、政治学や経済学の知識も十分で、現地事情に詳しく、さらに……も、ということになります。国際関係学部ではこうした能力を獲得するカリキュラム体系を整えています。協調性、チームワーク、主体性、積極性などは通常の大学教育では養成できないと思われるがちですが、本学部では必修の少人数ゼミナ

ルを通してこれが可能になります。また、外国でのフィールドスタディーやインターンシップもこれらの能力の養成には有益です。このような体験型、参加型授業も交えつつ、(1)社会科学の専門教育(2)語学や異文化理解を含む国際教育(留学も含む)、(3)仕事をする上で必要となる能力を養成するキャリア教育をバランスよくとり入れた教育課程をさらに磨きあげ、社会の負託に応えたいと思います。キャリア教育やインターンシップを推進するにあたり、従来は不十分であった産業界や諸組織・団体との連携を図ってゆきます。しかし、あくまでも主人公は亜細亜大学の学生自身であり、このジャーナルに執筆している教員であり、事務職員です。特に、事業の成功のためには国際関係学部の教育に携わる教員の有しているグローバルな「能力、経験、知識」を教室内外で存分に発揮することが肝要です。このフォトジャーナルを通して、わが学部の有する貴重な「研究の蓄積」「教育のための資源」をご理解いただけるものと考えています。

多文化コミュニケーション学科 開設記念マレーシア映画上映会

増原綾子

多文化コミュニケーション学科が新設されたことを受け、2012年7月7日、第一回目の記念イベントとしてマレーシア映画の上映会が開催されました。学生や教職員のみならず、学外の方々も参加し、大勢の人に映画を楽しんでもらいました。YouTubeや増原ゼミの学生がスタッフとして上映会の運営を支援してくれました。

マレーシアは、マレー人、華人、インド人が共存する多民族国家であり、上映されたヤスミン・アフマド監督の『細い目』(原題Sepet)は、マレー人の少女オーキッドと華人の少年ジェイソンとの甘い初恋を描いた作品です。2004年につくられたこの映画は国際的に高い

評価を受け、2005年には第18回東京国際映画祭で最優秀アジア映画賞を受賞しました。ヤスミン監督は2009年に51歳の若さで急逝しましたが、『細い目』をはじめとして、『細い目』の続編『グブラ』(2005年)や、オーキッドの少女時代を描いた『ムクシン』(2006年)、遺作となった『タレントタイム』(2008年)など数々の作品を通して、多文化社会マレーシアにおける民族と宗教を超えた人と人との絆を、ユーモアあふれる暖かい眼差しで描き、彼女の作品はマレーシアを超えて広く世界中で愛されています。

上映会の後、亜細亜大学4年生(当時)のマレーシア人留学生、陳思聡(タム・シイチョン)君を招いての対談も行われました。陳君は、母語である広東語のほか、福建語、北京語、マレー語、英語、日本語、韓国語を話すマルチリンガルで、彼がどのような環境の中でマルチリンガルになっていったのかを語ってもらいました。また、映画を通じて垣間見

ることのできたマレーシア社会の現実について、例えば生活の中の言語の使い分けや異なる宗教を持つ人間同士の恋愛についても語ってくれました。彼の話の中には、マレーシア人は異質な人々を受け入れる態度が身に付いているため、学校でいじめの問題はあまり起こらないといった興味深い事実もありました。フロアの学生からも質問してもらい、陳君に対して数多くの言語を習得するコツは何ですかという質問が出ました。陳君の回答は「現地に行ってその社会に身を置いて生活することに尽きる」という、まさに多文化コミュニケーション学科の学生が模範とすべき答えでした。

映画上映会を企画し、当日は司会・進行役を務めました。上映会がこのように充実したものになるとは予想していませんでした。ゲストの陳君をはじめ、多くの先生方や学生さんが盛り上げて映画上映会を成功させることができました。あらためて皆さんに御礼申し上げます。



上：マレーシア映画上映会のチラシとポスター
左：チケット



多文化コミュニケーション学科 開設記念講演会

中野達司

2012年11月17日(土)、多文化コミュニケーション学科開設記念行事の第2弾として講演会「多文化世界へはばたく君へ」(講師・野口健)が15時から亜大2号館200番教室で行われた。野口

氏は本学国際関係学部の卒業生で、在学中に世界七大陸最高峰踏破の世界最年少記録を打ち立てた方であり、現在、アルピニストとして、また環境活動家として積極的に活動されている。また、その開設が講演会の名目にもなっている、多文化コミュニケーション学科の客員教授として「体験で学ぶ地球環境論」という科目を平成26年度から担当されることになっている。

講演会は前半、後半の2部構成となっており、前半部では野口氏が講演され、後半部は彼を囲んでの座談会であった。また、多文化コミュニケーション学科を中心とする本学の学生は勿論のこと、高校生や市民も含む約200名の参加があった。会の運営は多文化コミュニケーション学科の学生ボランティアが中心となった。

講演の冒頭では野口氏の活動を収録したビデオが映写され、エベレストの雪中での死と隣り合わせの彼の活動などに、観る者は息を飲んだ。その後の講演において氏は、外交官だった父親の任地に住んだ自らの在経験を語り、その頃父親から言われたという「物事にはA面とB面がある」という言葉を紹介し、ものの見方についての含蓄ある話で聴衆を惹きつけた。

後半の座談会は野口氏を中心に、多文化コミュニケーション学科の教員(新妻仁一教授、金柄轍教授)と学生(1年

生、4名)によって構成され、金教授が司会を務めた。新妻教授は野口氏の在学中のゼミ担当教員であるが、当時の手帖を持参し、登山活動と学業の両立で苦労した微笑ましくもあるエピソードを手帖に残っているメモを見ながら語って座を和ませ、学生は野口氏に「大学に学ぶ意義」などについて質問をし、当意即妙の答えに座も会場も大いに盛り上がった。

金教授の軽妙なさばきで充実したやり取りが交わされ、あっという間に所定の時間が過ぎ、もっと訊きたい、喋りたい、そして聴きたいとの雰囲気の中で閉会となったが、時間さえあれば如何様にも発展していきそうな座談会であった。閉会後も野口氏に個人的に質問をする学生が列を作り、次の予定のために時間が押していた野口氏であったが、後輩の求めに最大限応じてくれていた。



講演会、座談会とも盛り上がりを見せた。

後記

新規刊行物たる本誌の、その発刊の趣旨は、学部長による巻頭言（「新学術誌『榧』の創刊を祝して」）をお読みいただければおわかりになろう。誌名（特に「榧」の部分は「おや?」と思われたのではないだろうか）の由来も然りである。

本誌は今年度（平成25年度）前期中に創刊が決まり、それから第1号たる本号の準備に入ったが、何とか発行にこぎつけられた。アジアあり、アフリカありの、世界の諸地域を題材とするエッセーと、ゼミやフィールドワークなどの学部内の諸事の紹介から成るが、何れも視覚にも訴える、フォトジャーナルらしいものと思われる。また、これをお読みいただければ、その教育内容が文部科学省「グローバル人材育成推進事業」に採択された亜細亜大学国際関係学部が、どんな学部なのかある程度わかる、というような内容ではなからうか。とはいえ、試行錯誤の結果の第1号である。改善すべき点は多々あろう。読者からご感想、ご批判、そしてご提言をお寄せいただければ幸甚である。

本誌の刊行にあたっては亜細亜大学当局、とりわけ総合企画部学務課のご理解とご協力を賜った。また、アローコーポレーションには本号の編集、印刷をお引き受けいただき、特に同社の編集担当者、遠藤麻美さんにはプロとして本号の完成をお導きいただいた。御礼申し上げます。

最後に、より身内のことで恐縮だが、珠玉の巻頭言をお書きくださった永綱憲悟学部長他、厳しいスケジュールの中で執筆してくれた学部の同僚諸氏には感謝あるのみである。また、本誌が日の目を見るまでの諸面において知恵を絞り協力してくれた同僚、新妻仁一教授、角田宇子教授、高山陽子准教授、太田瑞希子講師にも感謝申し上げます。特に新妻教授には誌名について、また高山准教授には表紙等のデザインに関して、ご協力いただいたことに敢えて言及したい。本誌のようなものを刊行するというアイデアを提供し、さらに発刊実現に至る過程での諸問題に的確に対処してくれたのは大塚直樹講師であり、同講師なくして本誌の発刊はなかった。また、本号の発行のために労を惜しまず、実質的編集長の役割を果たしてくれたのも大塚講師である。記して謝意を表したい。

中野 達司

執筆者紹介（五十音順）

秋月 弘子（あきづき ひろこ）

国際関係学部国際関係学科・教授。主な研究分野は、国際法、国連研究。

新井 敬夫（あらいたかお）

国際関係学部国際関係学科・教授。主な研究分野は、発展途上国の経済分析と開発政策。

大塚 直樹（おおつか なおき）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

金 柄徹（きむ びよんちよる）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な研究分野は、文化人類学。

高山 陽子（たかやま ようこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

榧

KAYA 国際関係フォトジャーナル 1
2014年3月31日発行

発行：亜細亜大学国際関係研究所
印刷：アローコーポレーション

問い合わせ先

亜細亜大学国際関係学部

〒180-8629

東京都武蔵野市境 5-24-10

<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

* 本雑誌記事の無断転載を禁じます。

©2014 Faculty of International Relations, Asia University

永綱 憲悟（ながつな けんご）

国際関係学部国際関係学科・教授。主な研究分野は、現代ロシア政治。

中野 達司（なかの たつし）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、体験で学ぶ地球環境論、中南米の社会と文化。

福海 さやか（ふくみ さやか）

国際関係学部国際関係学科・特任講師。主な研究分野は、国際安全保障論。

増原 綾子（ますはら あやこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、インドネシア語、東南アジアの社会と文化。